

# 三種の『三昧資糧論』について

望月 海慧

はじめに

チベット大蔵経のテンギユルの「中観部」には三種の『三昧資糧論 (*Samādhisambhāraparivarta*)』が収められている。最も大きなテキストがボーディパドラによるもの<sup>1</sup>であり、その著作スタイルを真似てコンパクトな内容にまとめたものがクリシュナパーダによるもの<sup>2</sup>であり<sup>3</sup>、最も小さな偈頌で著されたものがディーバンカラシュリージュニャーナによるもの<sup>4</sup>である。彼ら三人の関係については、チベット仏教史に関するテキストの『テプテル・ゴンポ<sup>5</sup>』によると、前二者がディーバンカラシュリージュニャーナの師であったと伝えられている<sup>6</sup>。同一の伝承に属する三名が著した同一タイトルのテキストには、相互に何らかの関係があった可能性もある。

筆者は、すでに最初のテキストの内容<sup>7</sup>、およびそれが最後のテキストの著者に与えた影響に関する考察を発表してきた<sup>8</sup>。本稿では、第二のクリシュナパーダによるテキストを中心に他の二書との関係を考察し、最後にこれらの三種の『三昧資糧論』の和訳を提示することにする。

## クリシュナパーダの著作

チベット大蔵経にはクリシュナパーダに帰されるテキスト<sup>9</sup>のうちタントラに関係するテキストとしては、56書を数え上げることができる<sup>10</sup>。その一方で『三昧資糧論』と同じく顕教に関するテキストとしては、次の5書が中観部に収められている：

『中観縁起 (*Madhyamakapratītyasamutpāda*)』 (P. No.5257)

『入菩薩行難解処決定書 (*Bodhisattvacaryāvatāraduravabodha[-pada]-nirṇayanāma-grantha*)』 (P. No.5276<sup>11</sup>)

『身遍観修習次第 (*Kāyaparīkṣābhavanākrama*)』 (P. Nos.5316, 5455)

『三昧資糧論 (*Samādhisambhāraparivarta*)』 (P. No.5320)

『三蘊成就法 (*Triskandhasādhana*)』 Tr. by Dīpaṃkaraśrījñāna and Tshul khriṃs rgyal ba (P. No.5509)

また彼は翻訳者としても知られ、タントラ・テキストの翻訳としては、23書を数え上げることができる<sup>12</sup>。その一方で顕教テキストの翻訳は、次の5書が中観部に収められている：

『入菩薩行難解処決定書』 (P. No.5276)

『身遍観修習次第』 (P. Nos.5316, 5455)

『三昧資糧論 (P. Nos.5320, 5445)

『経集解説宝光荘嚴論 (*Sūtrasamuccayabhāṣya-ratnālokāḷāṃkāra*)』 by Ratnākaraśānti  
(P. No.5331<sup>13</sup>)

『初学地修観 (*Ādikarmikabhūmipariṣā*)』 by \*Guhyajetāri (P. Nos.5341,5407)

最初の三書は自らのテキストの翻訳でもあり、いずれも中観部に収められている。これらの情報から、彼のメイン・フィールドはタントリストである一方で、顕教としては中観の修習法に関心があったような印象を与えられる。もちろんこれは後代のチベット大蔵經の編纂者がこれらのテキストを中観部に収録したためであるが、このような傾向は他の二つの『三昧資糧論』の著者であるボーディパドラとディーパンカラシュリージュニャーナと同じものである。この秘密行中観派と命名できるような思想系譜は、三者の関係を裏付けるものでもある。

### 『三昧資糧論』の内容

次にこれらの三種の『三昧資糧論』を比較する上で、それぞれの内容を簡単にまとめてみる。まず最初にボーディパドラによる『三昧資糧論』の内容は、その冒頭において、

そして三昧の資糧の支分は九種である。すなわち、(1)捨てるべきものと、(2)前行と、(3)退けるべきことと、(4)苦悩を断じることと、(5)意を生じさせることと、(6)功徳を記憶すべきことと、(7)精進すべきことと、(8)結びつけるべきことと、(9)住する方法と言われるものである。

と述べたものにまとめられ、菩提の資糧を九つのセクションに分類したものである。そこで論じられる内容は次の通りである<sup>14</sup>：

1. 捨てるべきも
  - 1.1 魔
  - 1.2 魔の業<sup>15</sup>
    - 1.2.1 欲天の業
    - 1.2.2 四世間守護の業
    - 1.2.3 魔種の餓鬼の業
  - 1.3 魔の業は精進から生じる
  - 1.4 魔の業を退ける
  - 1.5 邪魔
  - 1.6 邪魔を退ける方法
2. 前行
3. 退けるべきこと
4. 苦悩を断じること

5. 意を生じさせること
6. 功徳を記憶すべきこと
7. 精進すべきこと
8. 結びつけるべきこと
9. 住する方法
  - 9.1 場所に相応しい食物と行道に相応しい衣服と友人
    - 9.1.1 相応しい場所
    - 9.1.2 相応しい食事
    - 9.1.3 相応しい友人
    - 9.1.4 相応しい衣服
    - 9.1.5 随順する行道
      - 9.1.5.1 よく住すること
      - 9.1.5.2 苦を制圧すること
      - 9.1.5.3 特別な行道
  - 9.2 ヨーガによる心の平静
  - 9.3 止
    - 9.3.1 内部を見ることにより得られるもの
      - 9.3.1.1 身体を対象とすること
      - 9.3.1.2 身体に依存するもの
    - 9.3.2 外部に見られるものを対象とすること
      - 9.3.2.1 特殊なもの
      - 9.3.2.2 共通なもの
  - 9.4 観
  - 9.5 無分別智
10. まとめ

これらの各項目に対して、それぞれ聖典根拠としての経論が引用されている。引用回数が多いものは、『妙臂菩薩所問経』が14度、シャーンティデーヴァの『入菩提行論』が13度、ナーガールジュナの『親友書翰』が5度、『入法界品』が4度、『忿怒勝義儀軌秘密タントラ』が3度、サラハの『ドーハー・コーシャ』が3度である。特定のタントラ・テキストと中観論書の引用が特に多いことがわかる。ただし後者に関しては、中観思想の核となるテキストではなく、その修行体系に関するものである。

クリシュナパーダの『三昧資糧論』の内容も、ボーディバドラの著述スタイルを真似て、三昧のための資糧を支分ごとに分類したものである。それを列挙すると、次のようになる：

1. 前行
  - 1.1 根本に対する信
  - 1.2 善友への依存
  - 1.3 尊敬をすること
  - 1.4 大きな心
  - 1.5 精進
  - 1.6 失望しないこと
  - 1.7 自慢を捨てること
2. 高貴なあり方を損なわないこと
  - 2.1 他者の過失を考察しないこと
  - 2.2 自分の功德を自慢しないこと
  - 2.3 恥を知ること
  - 2.4 三律儀を行うこと
  - 2.5 力をもって住すること
  - 2.6 タントラを量として修行すること
  - 2.7 不殺生
3. 障害を捨てること
  - 3.1 少欲知足
  - 3.2 食欲の増大を捨てること
  - 3.3 怠惰を捨てること
  - 3.4 過多を知ること
  - 3.5 大義に入らないこと
  - 3.6 非如理をなそうとしないこと
  - 3.7 対治に行く者に頼ること
4. 自分で自分を鼓舞すること
  - 4.1 人身と仏法を宝と思うこと
  - 4.2 その成就是大きな意味をもつと思うこと
  - 4.3 世間の所作は無意味だと思うこと
  - 4.4 他者の苦を自分の対治と思うこと
  - 4.5 魔の掌握と死を思うこと
  - 4.6 積集を知るべきこと
  - 4.7 自分の皺や白髪を考察しない
5. 欲望を中断する支分

- 5.1 仏智をすべて述べることはできないこと
- 5.2 人が喜び難いことを思うこと
- 5.3 愛憎を捨てること
- 5.4 兄弟や朋友は客人の道をまとめたものに似ていると思うこと
- 5.5 利得と尊敬などは誘惑するものであると知ること
- 5.6 利得と欲望などは毒や武器と同じであると知ること
- 5.7 内外の事物を幻のように考察すること
6. 目的を速やかに成就する支分
  - 6.1 寂処に住むこと
  - 6.2 天を喜ぶこと
  - 6.3 精進を強くなすこと
  - 6.4 期待・懐疑・欲望・恐怖を捨てること
  - 6.5 誓願を成就させること
  - 6.6 夢などに対して悲喜を起こさないこと
  - 6.7 夢の意味を知ること
7. 身体を護り損害を明らかにする支分
  - 7.1 衣服・食物・薬など適切なものを行じること
  - 7.2 人と非人を損害から護ること
  - 7.3 適切な場所に住すること
  - 7.4 身体と心を疲労させる行為をなさないこと
  - 7.5 夜中と正午と病氣時に精神集中の努力をしないこと
  - 7.6 疲労時に哀痛を滅除すること
  - 7.7 ヨーガによる身体の等至
8. 補足の支分
  - 8.1 怠惰などが生じた際にその対治を起こすべきこと
  - 8.2 身体や心に損害が生じた際にそれらを治すべきこと
  - 8.3 師の許可などがあつたらタントラの四行を知るべきこと
  - 8.4 煩悩ではないものなどを経典から知るべきこと

三味資糧を七つの支分の七項目に分類したというスタイルはボーディバドラのテキストのスタイルを踏襲したと言える。これに補足項目として第八番目の四項目が添えられている。ここに示した項目が、そのまま実際のテキストのほぼ全文にあたる。

前二書と異なり、ディーパンカラシュリージュニャーナのテキストは45パーダからなる偈頌で書かれたものである。この11偈の内容を、便宜上まとめると次のようになる：

1. 菩提心を堅固にすること [1-4]
2. 正法の行を精進すること [5-8]
3. 成就の増益 [9-12]
4. マントラの理趣に住すること [13-24]
5. 三昧の支分 [25-43]
6. まとめ [44-45]

最初の菩提心は、著者が他のテキストでも強調する項目である。ここで注目すべきことは、著者が三昧をマントラの理趣と同一レベルにあるものにとらえていることである。また三昧の資糧の細目は後半に述べられており、戒、忍、正知、随念、五障の捨、食事の量を知ること、行道、等心、器物の減となる。

### 三昧資糧とは何か

以上に見てきた『三昧資糧論』の内容から、彼らが述べる「三昧資糧」とは何かを考えてみる。

まずボーディバドラによるテキストのフロー・チャートを示すと、(1)魔の業を捨て、(2)聞智の前行をなし、(3)多聞を退けて神通による利他をなし、(4)戲論を捨てることで苦悩を断じ、(5)衆生に対する思いを起こし、(6)三昧の功徳を記憶し、(7)功徳の対治を意識して精進し、(8)精進により方便と智慧を結びつけて空性を修習し、(9)三昧に相応しい場所で止観を行じることで無分別智を得るとなる。基本的には聞・思・修の三学を基本としており、三昧資糧とは止観行に至る修習をまとめたものとなる。このようなあり方は、先行するカマラシーラの『修習次第』の構成に基づいているように思える。

続いてクリシュナパーダによるテキストのフロー・チャートを示すと、(1)前行をなし、(2)高貴なあり方を損なわず、(3)障害を捨て、(4)自身を鼓舞し、(5)欲望を断じ、(6)目的を成就し、(7)身体を護るとなる。ここにも前行という項目が設けられているが、その詳細は前書とは異なっている。続く項目においても細目は異なっているが、最後に具体的な三昧のあり方が述べられている点は類似している。

最後のディーパンカラシュリージュニャーナによるものについては、パーダ25-43に列挙される項目が彼にとっての三昧資糧となる。そこに述べられるタームを並べると、(1)戒、(2)財富を見ないこと、(3)忍の誓願、(4)混乱の捨、(5)業の正知、(6)仏への尊敬と賞讃の記憶、(7)随念の堅固、(8)五障の捨、(9)食事の量を知ること、(10)行道、(11)心の等至、(12)器物の減となる。前二書に比べると、全体の構成を考えた上でこれらの細目が設定されたという印象は得られず、むしろ三昧のための資糧を口頭で講義する際に、これらの項目が述べられたように思われる。

これらのテキストに共通する内容としては、前半に三昧の資糧となる具体的行為があげられ

ている。それらは、三昧に対するネガティブな要素の排除と、ポジティブな行為の推奨である。しかしながら、これらは三昧という行為に限定されるものではなく、六波羅蜜と共通するものもあり、広く菩薩行のタイトルで並べても違和感はないものである。しかしながら、最後には三昧に関する項目が述べられており、それぞれのテキストのテーマを最後にまとめたような形になっている。

#### まとめ

これらの三種の『菩提資糧論』の関係は、どのようなものであったのだろうか。まず三者の関係は、チベット資料によると、ボーディバドラとクリシュナパーダはディーパンカラシュリージュニャーナの師とされていることから、最後の著者によるものが最も新しいものであると推測できる。ボーディバドラのものとクリシュナパーダのものは、テキスト構成は類似するものの、その細目に関しては異なっている。それが意図的なものかどうかは不明であるが、その細目については著者自身の解釈を述べたよう思える。その一方で、ディーパンカラシュリージュニャーナによるものは小さなテキストであるために断定はできないが、前二書との関係は薄いように思える。もちろん先行するテキストを読んでいた可能性があるが、本テキストを著す際に、それらのタイトルは念頭にあったものの、その内容を記憶した上で著述あるいは口述したようには思えない。

最後にこれら三書関係をまとめると、ボーディバドラとクリシュナパーダのものは密接に関係しており、ディーパンカラシュリージュニャーナによるものはそのタイトルのみを借用して著されたように思える。

## 『三昧資糧論』和訳

インドの言葉で、*Samādhisambhāraparivarta*

チベットの言葉で『三昧資糧論』

仏と菩薩のすべてに敬礼する。

### 0. 序

存在する限りおられる仁王の御子がおられる方々に敬礼して、真言の經典と般若經典に従う三昧資糧の頌が述べられる。

現在の人ほとんど魔の釣針により捕らえられ、家という監獄にしっかりと入っている。魔の世間の四守護が行進することにより護られ、愛欲などの束縛によりとてもしっかりと縛られている。律儀を始めた者たちもほとんど魔の世間の四守護に支配され、沙門の場所と理趣を捨てた在家の者たちと行が同じである悪趣の深淵に明らかに向かい、天上を捨てるであろう。それ故にこれは自分自身の記憶のためになすが、利他を望むことはない。それでも自分と同分の者がいるこの場所を喜ぶならば、正しい理解により述べるこれを聞きなさい。

そして三昧の資糧の支分は九種である。すなわち、(1)捨てられるべきものと、(2)前行と、(3)退けられるべきことと、(4)苦悩を断じることと、(5)意を生じさせることと、(6)功德を記憶すべきことと、(7)精進すべきことと、(8)結びつけるべきことと、(9)住する方法と言われるものである<sup>16</sup>。

### 1. 捨てるべきもの

そのうち捨てられるべきものは魔の業である。その魔とは何か、その業は何かと言うのならば、魔とは、「罪をもつ」と言う妻の蓮華の鬘をもつ欲天と、四種の周りの世間を護るものと、魔の種である餓鬼をとまなうものである。

それらの業は、その妻がもつ頭上に五つの花の矢がある欲天はこうである。すなわち、「自慢をすることと、障害となることと、普く障害となることと、沈めることと、無心になすこと」と言うものである。その花がそれらを刺して傷つけてから五煩惱の大部分をそれが傷つけるだけで燃え上がるだろう。その勢力に至って、解脱と明高を損なうであろう。

その四種の周りの世間を護るものはこの通りである。すなわち「論争をさせることと、動かすことと、さらに執着することと、想を顛倒させること」と言うものである。それらの魔の業は種々である。



このようにその論争をさせる魔は、道を修習する者たちを論争と論難と争いに入らせ、その縁を努力により成立させる。

その動かす魔は、道を修習する者たちの睡眠と昏睡を広げたり、法を聞く者たちも睡眠に結びつけたり、ある者の心を散乱させながら住している。

そのさらに執着する魔は、一般に家に住するものを中断させるもので、布施の時に近くにいる、「息子と娘と妻と自分自身を何かに利用する」と言って、自分の肉を切断しようという思いを近くに成立させる。

想を顛倒させる魔は、一般に出家者の方向を破するもので、このように出家の心が近くにある際に、性交の楽しみと、食物と飲物の楽しみと、自分の人の集まりと、歌舞などの記憶による愛着と、その自分の人による誘惑と詐欺と威嚇と捕獲によりその出離を中断させることに入る。出家者たちにも女性の姿を思うことと、先に笑うことと、遊びを記憶することと、交易と農業と、自分の結合と意を許せるべき心を起こし、夢の中で女性に変化し、それにより愛着と種子を生じさせ、種々なるものによっても出家から降下し、彼らの梵行を有垢なものにもする。

これらの四つとも、ジャンブードヴィーバの者たちを苦しめるために凶暴な龍たちを勧請し、非天たちを勧請し、収獲を腐らせ、非法をもつ者の命を奪い、身体に種々なる病気を与える。例えば四王が非法を修行する者たちに罰を与えるように、これらは法をもつ者たちに対して罰を与えている。

魔の種の餓鬼は、餓鬼の三十六種からこれらを一つの種に計算したものである。それらの魔の業は、禪定をなす者たちの夢の中で恐怖を起こし、仏身の相と種好による飾りを近くに示すことで中断させ、禪定で瞑想する際に大声で叫ぶことをなす。まとめれば魔と魔の種に属するものたちは正しく入るすべての者に執着を起こさせ、恐怖を起こさせることにより中断させている。

そのようにまた『忿怒勝義儀軌秘密タントラ<sup>17)</sup>』に

尽きることのない禁行を保持する成就に魔の種がある。天女が望む身体と同じく他の身体でも種々なる相をもつ身体により根が縛られたものを損なう。

と説かれており、ここに禁行が近くに設定される。業に相応するすべての心に対してもそれは近くで損なうことをなす。

そのようなそれらの魔の業は誰から生じるのかと言えば、想を浄化することで正しい精進から生じる。例えば『聖文殊師利神変経<sup>18)</sup>』に説かれている。

「マンジュシュリーよ、菩薩の魔の業は何から生じると知るべきか」。マンジュシュリーが言う。「天子よ、菩薩の魔の業は精進から生じると知るべきである。それは何故かと言えば、不精進な者に対して魔が何をなすべきか。それ自身が魔であるから」。

と言われる。そのように魔の業を知ることによりそれを退けるべきである。例えば『聖天子最勝宝所問經<sup>19</sup>』に説かれている。

何時であれ魔の業を考察するそのような場合には、罪過は存在しない。魔の業を退けたものはそのような欠点がないものである。

と言われる。それを退けずに解脱は得られないだけである。例えば『聖妙臂菩薩所問經<sup>20</sup>』に説かれている。

邪魔は福德を残らず尽くしてしまう。それ故に人に真言を成立させない。例えば月が雲から抜けるように、そのように邪魔から解放されることを明らかにする。

と言われ、ここに邪魔も二種である。完全なる菩提を破壊するために結合する天子の魔とそれ以外のものとであり、例えば『聖妙臂菩薩所問經<sup>21</sup>』に、

施食を望み、遊戯をなそうとし、秘密のために身体を下げて入る。

と言われ、ここにその両者を退けるべきである。いかなる方便により退けられるのかと言えば、例えば『秘密大瑜伽タントラ金剛頂<sup>22</sup>』に説かれている。

「自分の心が魔である」と説かれている。自分の心自身が邪魔である。一切の分別を捨てるべきである。邪魔はすべて分別から生じる。

と言われる。さらにまた魔の業を退ける方法は、『聖無憂施授記經<sup>23</sup>』と『聖獅子所問經<sup>24</sup>』から知るべきである。これは捨てるべき支分である。

## 2. 前行

誰であれ聞の自性により智慧を起こしていない者は魔の業を退けることができず、心の等至もあり得ないので、最初に聞性を先行させるのである。例えば、

智慧を広げることが聞である。思との二つが存在するならば、それから修を合わせるべきであり、それから無上の成就を得る。

と解説されており、『聖菩薩十莊嚴説示品<sup>25</sup>』にも、

ああ、王子よ、その初学者の菩薩は、最初のものとして読経に励むべきである。多く聞いてから寂靜に住することを励むべきである。

と説かれており、その意味のように『聖郁伽長者所問經<sup>26</sup>』と『聖方広総持宝光明經<sup>27</sup>』に説かれている。そのように『聖入法界品<sup>28</sup>』にも、

最初に聞こうとする師に奉仕することに耐え、それによりなされ、無自性の法を正しく理解する禪定を得て、善逝性を考察する有情は飢渴の心を制圧し、その法性と同じように修行して速やかに善逝を得るであろう。

と説かれている。そのように『聖声聞波羅提木叉經<sup>29</sup>』にも、

多く聞いて森の中で青年期を過ごす者たちの住処は楽である。

と説かれている。それ故に聞の智慧自身は目的を成就させる前行である。これは前行の支分である。

### 3. 退けられるもの

そのように聞をもつその菩薩は説法に入ることを退けるべきである。というのは神通を得ず多聞だけにより他者への利益を勝者は説かれていない<sup>30</sup>。それ故に『聖菩薩十莊嚴説示品<sup>31</sup>』に、

その初学者の菩薩は最初のものとして読誦を奨励される。多くを聞いてから寂靜処に住することを奨励される。寂靜処に住する者になってから善友となることを奨励される。善友となってから我々の年を楽しむことを奨励される。我々の年を楽しんでから時を知ることが奨励される。時を知る者になってから無畏を奨励される。無畏になってから意味を知ることが奨励される。意味を知る者になってから法に従うことを奨励される。法に従う者になってから障害がないことを奨励される。障害がない者になってから笑うことを奨励される。それは何故かと言えば、それによっても大部分において一切衆生への大悲が先に設定され、どんな場所で聞いてもそれを自分自身で修行し、自分と他者の信頼に頼るべきではないからである。ああ、王子らよ、これは初学者の菩薩の笑うことである。

と説かれている。この同じ意味は『聖郁伽長者所問經』と『方広総持宝光明經』にも説かれている。さらにまた『聖発志樂所問經<sup>32</sup>』にも、

「私は成就を損なった今、何をなすべきなのか」と童子は死の時に困難をなす。

などと多くを聞いた者が寂靜に頼らずに法を説いたならば、とても多くの過失の相が説かれているのでそれを正確に見るべきである。それ故に多聞だけでは法は説かれず、それから退いて神通を得て初めて有情利益がなされる<sup>33</sup>。これは退けるべき支分である。

### 4. 苦惱を断じること

そのように説法から退き、戲論を捨てるそのことは、こうである。それでも自分が蘊を知っても完全に到達することはない。界と処に巧みであっても成就には到達しない。それらを知ることがなければ、解脱も得られない。例えば（『大乘莊嚴經論<sup>34</sup>』に）、

五明処を精進せず、最高の聖者にも一切智性は成立しない。それ故に他者を責めることを保持し、自分で普く知るべきなのでそれを彼は精進する。

と説かれているからと考えると、さらにまた弟子との学ぶ関係と、利得と尊敬と名声と言葉と偈頌の楽しみを望むことを浄化すれば、それは確実に退けられる。法を聞いてから修習することにより浄化されないならば、何も賞讃されない。例えば『聖入法界品<sup>35</sup>』に説かれている。

この正しい仏の説法は、聞だけでは成立できない。例えば河により力なく流されてしま

う者が溺れて死んでしまうように、修習されない法もその如くである。と言われ、また（同経<sup>36</sup>に）説かれている。

例えば大海で瞑想する者がすべての人を救っても、自分自身がその中で死んでしまうように、修習されない法もその如くである。

などと言う修習により浄化しない過失がとて多く説かれており、詳細は同じものから知るべきである。それ故に心を瞑想に設定できる者は、教授だけで満足して心の性質が一瞬にして生じても、師に尋ねて修習すべきである。因明学の七論と声明学の四論とアビダルマの七論書と『声聞地』などの相により意は乾かない。例えば『ドーハー・コーシャ<sup>37</sup>』に、

誰であれ師の教授という甘露水を望むことなく涼しさに満足して飲まない者は、論書という多義の砂漠の平原で渇きに苦しみ死んでしまう。

と解説されており、無量劫にわたり疲れてしまっても、言説を近くに結びつけたものは尽きることがないが、寿命に到達してしまう。それ故に『外部ヘールカ<sup>38</sup>』にも、

ヨーギンは外を巡り、その界に尽きるであろう。それ故に外部をすべて捨てて、ヨーガの側により住すべきである。

と説かれている。そのように『ドーハー・コーシャ<sup>39</sup>』にも、

諸対境を彷徨い欲望により苦しめられても、サハジャを得ない者は過失により捕らえられている。

と解説されている。蘊と界と処を知ることもヨーガの力により同一時に成立するが、それらを次第に学ぶことからではない。例えば『聖金剛頂<sup>40</sup>』に、

それから知が生じるであろう。聞かなくても知るであろう。

と説かれており、『妙臂菩薩所問經<sup>41</sup>』にも、

言葉は把握される意味があり、精通することで、修辭学とは書くことに長けていることである。

と説かれている。これらもヨーガの力から生じたものであるが、順番に学ぶ機会ではない。『阿毘達磨俱舍論<sup>42</sup>』にも、

尽きることを知ることは有漏であっても。

と説かれている。利得と尊敬という欲望を望むことは意を生じる支分から知るべきである。これは苦悩を中斷する支分である。

## 5. 意を生じること

一切の相において衆会への意を生じることなく修習することでは浄化をなすことはできないので、それへの意を起すべきである。例えば『入菩薩行論<sup>43</sup>』に解説されている。

最初に止を求めるべきであり、それはまた世間に対する無執着を喜ぶことによる成立す

る。

と説かれており、ここで友人を明らかに喜び、敵を嫌うことによる執着と、無病と年齢などに対する執着と、自性による有に対する執着と、利得と尊敬と名声と声と偈頌に対する執着は捨てられるべきである。例えば『妙臂菩薩所問經<sup>14</sup>』に説かれている。

しばらくすれば敵も朋友になり、朋友も敵にもなるものである。そのようにある者も中間になり、その中間の者も敵になり、そのように朋友になることを知ってから、知恵をもつことで決して執着すべきではない。友人を喜ぶ心の考察を退けてから善のうち好ましいものを設定すべきである。

と言われる。聖ナーガールジュナも（『親友書翰<sup>15</sup>』に）、

父は子になり、母は妻になり、敵は味方になり、反対になることもあるので、それ故に輪廻する者にはいかなる確定もない。

と解説されている。それ故に友人と敵に対する執着が完全に捨てられる。そのように（『無常經<sup>16</sup>』に）、

無病は無常で、若さは常住でなく、長寿は無常で、円満も常住ではない。

と説かれているので、それらに執着することも完全に捨てられる。利得と尊敬と名声と言葉と偈頌に執着することも捨てられるだろう。次のように『入菩薩行論<sup>17</sup>』に説かれている。

「私は多くの利得があり、尊敬される。私を多くの人が喜ぶ」というようなことを思う者が衰えたならば、死の後に恐怖が生じるであろう。

と言うのと、また同じものに<sup>18</sup>、

利得を得たものが多く生じ、名声が生じても、利得と名声を集めてどこに去ったのかわらない。

私を責める他の者がいるところで、賞讃されて私がどうして喜ぶだろうか。私を賞讃する他の者がいるところで、非難されて喜ばないことがどうしてあろうか。

と解説されており、また同じものに<sup>19</sup>、

衆生に利得がなければ非難し、利得があれば軽蔑する。本質的に関係し難い彼らが喜ぶことがどうして生じるであろうか。

と解説されている。さらにまた『聖発志樂所問經<sup>20</sup>』に、利得と尊敬という過失をとっても多く説くのでその業を知るべきである。ここに弟子とまた学処などに執着することは悲の主体ではない。どのようにそれを捨てることを知るのかと言えば、そうではない。時機ではない悲は低いものである。神通を得ることなく弟子は完全に熟することはできず、自身の死に尽きてしまう。次のようにその『入菩薩行論<sup>21</sup>』自身に説かれている。

衆生の信解は種々である。勝者も満足させられないのに、私のような低い者が何を言えようか。それ故に世間の者を思うことは捨てられる。

と説かれている<sup>52</sup>。また同じものに<sup>53</sup>、

衆生たちに執着するならば、正しいものに対する障害となる。悲惨に思う心も滅し、最後に困難に苦しめられるであろう。それを思う者はこの時に意味なく過ぎ去るであろう。無常なる友により常住なる法も滅するであろう。

と解説されている。それ故に弟子などを知る結果による関係と世間の者の言説の関係の両者に対する悲心だけから執着することなく寂靜処に住すべきである。存在に対する自性による執着も捨てるべきである。例えば『妙臂菩薩所問經<sup>54</sup>』に説かれている。

世間の者に対して虎と蛇と火に似たものを想像してから捨てて、寂靜を喜ぶべきである。女性の相と人の相と薬と象を調べたり星の考察や武器を調べたり馬の考察を自ら作ったり、悪い論書を学んだり読んだりすることを捨てるべきである。

と言われる。また同じもの<sup>55</sup>に、

象と馬と鷺鳥と鳥と犬と雷鳥と山ウズラと家鴨と男性と女性と童子と羊などと、戦いと争いを見るべきではない。変化の話と自在者と依存される者と軍隊と力士と年少の話と寓話と謎語と過去の歴史の話と食欲と娼妓の話をなすべきではない。秘密のマントラを誦することにより、夏の三月は一人で住すべきである。

と出ている。また同じもの<sup>56</sup>に、

業の主人たる主体がなく、守護者がなく所依がなく、世代から世代への身体の相伝に従って行き、その付随する善と不善が随行し、生活と朋友と分かれて、醜いものと結合し、欲望により望み、悪趣に生まれ老い死ぬ苦しみをもつ。対境はどこに行っても存在せず、肉蠅や暑さと寒さや飢えと疲れなどでどこに行っても苦たるものなので、対象を喜ぶ心が生じたならば、その考察により退けるべきである。食欲が大きな者は不浄なものと肉と脂肪と皮膚と骨を見ることにより退けられる。慈愛と悲心の水が与えられた者は瞋恚を、無痴は縁起の道による。

と説かれている。聖ナーガールジュナも（『親友書翰<sup>57</sup>』に）世間の多くの過失を説いてから、

そのようにこの世はすべて無常で、無我で、帰依処もなく、護られるものもなく、住処もなく、後に輪廻は芭蕉の樹の心髄がないものであり、最高の人であるあなたは、御心を起こすべきである。

と解説している。さらにまた『入菩薩行論』と『七童女阿波陀那<sup>58</sup>』と『親友書翰』と『弟子書翰』などのテキストに依存して、存在に対する自性による執着を捨てるべきである。これは意を生じさせる支分である。

## 6. 功徳を記憶すること

そのように対立する方向を捨ててから三昧の功徳を記憶するべきである。そのうちここに功

徳は二種である。見える法を領受することとそれ以外とである。どのようなのかと言えば、身体を喜んで住し、言葉を喜んで住し、心を喜んで住し、法を守る者たちは喜び、その人が身体を得ることは意味があり、先生と父母と師の記憶を思い出し、人でない者により傷つけられず、病気は少しになり、寿命は長くなり、死の時に後悔がなく、賢者たちにより賞讃され、食物と飲物と座具と病の薬と衣服を容易に得て、煩惱と業を損なう。これらが最初の功德である。

何れかの望んだ仏国土に生まれ、三悪趣を捨て、残りの難を捨てて、女性に生まれず、鋭い能力と三宝を離れることなく、そこでも三昧を喜び、等証菩提を成立させる。これは第二の功德である。

浄化することは、「寿命が与える者により与えられ、天の住処にこの寿命の時に行く」と言われる。この同じ意味を考えて、尊主チャンドラゴーミンが自分の弟子のために（『弟子書翰』<sup>39</sup>に）、

月輪の明かりにより飾られ、中腹に宝雲を帯びている山の頂上にある森のその空間で執着することなく、風のように動く性質の寿命が尽きるのは大きな梯子である。

森の中で動物を追って彷徨う者たちが依存し、普く美しいところで楽しいものが喜ばしい森林で天女の臀部に階段で来られる石板をもつものにも存在するのか。

美しく静かで好ましい川岸がある森の中に天女の美しい香りをつけたおさげ髪の飾りが連続する花を集めた美しさにより調伏された天の川にも存在するのか。

幅広い峡谷にいる人は弱ることなくとても楽しみ、受容品が広大で森林の周辺を先に生まれて行列で行進し、川岸に聞こえる溪流の流れの声を刈り取るように聞く者が「我々は雑染をとまなう対象ではない」と招宴を宣言するように。

と説いており、規範師シャーンティデーヴァも（『入菩薩行論』<sup>40</sup>に）、

森の中で追われる動物たちや樹たちは聞かずに述べることもなく、一緒にいれば楽しい彼らと一つ一緒に私は住するだろうか。

洞窟や空き寺や木の根に住して、後ろを見ずに執着がなくなるだろうか。

自分が所有するものがなく自由に広々とした大地で自在に行じ、執着なく自分の場所になろうか。

鉢などの僅かなものと誰も欲しがらない衣を着て、この身体を護らなくても恐怖なく住するだろうか。

墓場に行ってから他者の白骨と自らの身体を世間の法をもつものとして比べるであろうか。

と解説されている。そのように『聖月灯三昧経』<sup>41</sup>などから三昧の功德を詳細に知るべきである。これは功德を記憶することにより広げる支分である。

## 7. 精進すべきこと

そのように功德を見てからその広がったものにより対治を意識することで正しく広げるべきである。次のように『入菩薩行論<sup>62</sup>』に、

例えば忍耐した者は精進を始めるように、精進の上に菩提は存在する。風がなければ動くことがないように、福德は精進なしに生じない。

と説かれているように。次のように自分で精進することにより望む目的が成立しないのならば、この時にとても動くので意を堅固にすべきであり、「長く住するようにする能力がないので一刹那だけでも心を乱すべきではない」と思うべきである。この意味を御心におかれてから聖ナーガールジュナが（『親友書翰<sup>63</sup>』に）、

この寿命は災いが多く、風により吹かれた水の泡よりもはかないので、息を吸うことと息を吐くことと、眠りを退けることよりも、退けることができる者はとても珍しい。

と説かれており、また（『親友書翰<sup>64</sup>』に）、

頭や衣服に突然火が降りかかると、それらから取り除いた後にも、また生じることがないように努力しており、これよりも最大のなすべきことは他にない。

とシャータバーハナ王のために教授をなしている。尊主チャンドラゴーミンも自分の弟子に対して（『弟子書翰<sup>65</sup>』で）次のように、

人の状態はとても得難く、得てからも目的として考察したそのものを勤勉に完成させるべきである。灯火の強烈な炎が風により揺らぐような寿命が刹那に存在するという確信もありえない。

「これは明日して、これはすぐ後にやろう、これはいつかやろう」と人が思うならば、閻魔が黒棒で打った側を見れば、目の根本は赤く、怒って喜ぶことなく笑うことを思い浮べる。

「春の花が咲く時にこれが生じ、月が明るいという特徴の秋にこれが生じる」と言う。すべての人が喜び、「私のこの寿命が尽きる」と言うことをとても喜ばない者はいないであろう。

と教授している。規範師シャーンティデーヴァも（『入菩薩行論<sup>66</sup>』に）、

意を堅固にすることに関係なく、この私の死はなすべきこととなすべきでないことを待たずに、病気と病気でないこととのすべてによっても突然であり、意は堅固にされない。

と解説されている。そのようにヴァーギーシュヴァラキールティも<sup>67</sup>、

「これをなす最中に再びこれをなし、それ以外のことをなす」と言う。存在が動く性質を知らずに無意味に意を堅固にすることを求める九生は、死を支配する口で、鯨の口の中に舟が入るように、なすべきことが完了せずに対境の水の波の中に落ちる。



と解説されている。そのように規範師サラハも（『ドーハー・コーシャ<sup>68</sup>』に）、

その遠いものをそのまま明日考える人は、財産を円満にすることを望んでも水により満たされた枡が漏れているように、明らかにならないようなものである。ああ美貌なものたちよ。

と説かれている。これは対治を意識することにより精進すべき支分である。

## 8. 結びつけるべきこと

そのようにその精進により二つの支分を結びつけるべきである。次のように止と観と方便と智慧である。何故かと言えば、止を堅固なものにしない観は堅固に存在することはない。灯火と風のように。観を離れた止により障害の網を残らずに浄化することはできない。例えば色と無色などの止は天を輪廻する如くである。それ故に『入菩薩行論<sup>69</sup>』に、

止を明らかにともなう観により煩惱を滅ぼすことを知ってから、最初に止を求めるべきであり、そして世間の無執着を明らかに喜ぶことが成立する。

と解説されている。そのように方便と智慧もどのようなのかと言えば、二種の身体を成立させるものと二種の障害を捨てることであるから。それ故に『聖維摩經<sup>70</sup>』と『聖伽耶山頂經<sup>71</sup>』に、

方便を離れた智慧は縛である。智慧を離れた方便は縛である<sup>72</sup>。

と説かれている。そのように『聖入法界品<sup>73</sup>』に誓願を成就させないために法の知恵を内に入れることを成就させない魔である。十魔の一つとして説かれている<sup>74</sup>。何故に空性だけでそれらが成立しないのかと言うのならば、成立しない。何故ならば結果は原因に追隨するから。それ故に『聖入法界品<sup>75</sup>』に説かれている。

言う最高のものは何でも適切である。一法により生じることはない。いかなるものも生じたものは存在するものではなく、生じるであろう通りに存在しないものである。

と言われる。そのように『聖金剛帳タントラ<sup>76</sup>』にも、

もし空が方便ならば、その際に仏性は成立しないだろう。原因より結果は異なるから。方便は空性ではない。

と説かれている。では何故に聖教に空性のみを修習することで十分であると説かれるのかと言えば、これは我見などの空性と矛盾するものに入っている彼らのために空性の偉大さが説かれている。そのようにまた同じ『聖金剛帳タントラ<sup>77</sup>』に、

諸見を誤っている者たちと我見を求める者たちが我執を退けるために、勝者たちは空を説いたのである。それ故に「輪を廻す」という方法が樂の律儀である。仏は自慢のヨーガにより仏性を速やかに成立するであろう。

と「空性だけに依存することなく、天身を修習すべきである」と説かれている。それ故に完全

なる菩提を得たならば、悲の心髓をともなう空性を修習するが、空性だけではない。聖教は意趣をもっている。例えばマンダラを与えられてから六波羅蜜を得ることを説いたように。それ故に聖教を言葉の通りに把握しておらず、しかも空性を修習することに卓越していれば、一切の善業が自分の中から生じる。最初に衆生利益のために空性に入ってから、声聞のように寂靜たるものにはならない。空性が堅固である限り衆生はそのように無分別に悲を生じる。例えば聖ナーガールジュナが（『菩提心積<sup>78</sup>』に）解説している。

そのようにヨーギンたちがこの空性を修習したならば、智者は利他を喜び、変化することに意味がない。

と言う。さらにまた、

法を無我と知る者は無自性を修習しているので、顛倒から生じた煩惱を障害なく捨てている。

と『中觀莊嚴論<sup>79</sup>』に解説される論理により煩惱は捨てられるであろう。誰であれ悲も捨てて、煩惱も寂靜にした者には、世間と出世間の功德が困難なく成立するであろう。それ故に因の最高のものになり、それは何らかのものから多くの功德を生じることを意図している。『聖大毘盧遮那成仏神変加持經<sup>80</sup>』に、

相をともなうものは相をともなうことにより正しい成就を勝ち取ると言われている。無相に住することにより相をともなったり成就したりするので、一切相において無相に依存すべきである。

などと説かれている。空性だけで十分に説かれたものである。これは結びつけるべき支分である。

## 9. 住する方法

そのように八支をもつ者が場所に相応しい食物と行道に相応しい衣服と友人が随順するようにして、心を等しく設定すべきである。そのうち相応しい場所は、『妙臂菩薩所問經<sup>81</sup>』に説かれている。

独覚と善逝自身が生まれ、勝者が以前におり、福德をもち、意が喜び、天と非天などに敬礼して供養をする場所で、布薩の律儀をもつ者は自分自身を清浄にするために依拠すべきである。そのようなものを得なくても、他にも大河や川や小川があり、蓮華や青蓮華により飾られた湖や、生き物があまり往来せず、きれいでおいしい水が多くあり、凶暴な魔もおらず、綺麗な花と果実があり、葉林や種々なる樹木に覆われ、地面に臥せるのにとてもきれいであり、虎や豹や獅子がおらず、快く平で棘がなく、人の成就の場所と呼ばれた所である。岩谷と洞窟で灰と梳いた髪と埃と石炭と硝の塊をもつものを捨てて、そこで粘土を練ってから住居に壁を作り、日中にかためて、泥で表面を塗るべきである。東や北や

西に門を向け南には決して門を向けない。

と説かれている。これは相応しい場所である。食事も続く執着がなく、量に尽き、身体の力に適当なだけ食べる。それ故に聖ナーガールジュナが（『親友書翰<sup>82</sup>』に）、

食事は薬に似ていると知ることにより、食欲と瞋恚なしに頼るべきである。食料のためではなく、傲慢のためでもなく、太るためでもなく、身体を保持するだけのためである。

と解説している。執着する罪過は、例えば『聖富楼那所問經<sup>83</sup>』にも説かれている。

甘い味を欲して執着して、諸過失を見ることがなければ、魔による時機を得るであろう。釣針により捕らえられた魚の如し。

と説かれている。そのように『妙臂菩薩所問經<sup>84</sup>』にも、

傷を治療し排除するために病気の者に薬が与えられるように、ここでも飢えの苦を排除するために勝者は食物を食べることが説かれている。ある者が道に疲れて行く時に、飢渴により苦しんで自分の子供の肉を食べるように、ヨーギンは心を低くして寿命と飲食物のために食べるべきではない。多く注ぐことにより努力なく高処に行き、そのように少しの時は重さが低くなり、釣り合いをとることで刹那等しくなるように、有身の者は食事をそのように食べるべきである。例えば古い家が壊れないために人がよい柱を添えるように。そのように身体の迷乱である輪廻に住することと車の眼を汚すように食事を食べる。「欲界は食物により住する」と勝者は一法にお言葉を述べている。身体は芭蕉のようであると知るべきである。心は飲食などに執着すべきではない。

と説かれている。そのように身体の感受が低いようならば、一切のヨーギンも断食をして住すべきではない。例えば『聖蘇悉地羯羅經<sup>85</sup>』に説かれている。

疲れてしまう過失があるので、断食して住することは非難されるものと解説されている。

と言う。もし身体に疲れがないようならば、身体を正しくするために一切のヨーギンも断食して住すべきである。例えば『妙臂菩薩所問經<sup>86</sup>』に、

「一子が身体を浄化するために断食をすべきである」と善逝は決して説いていなくても、この身体は不浄で、皮膚と肉と血液と骨髓と脳汁と腸と脾臓と肝臓と腎臓と脂肪と胆汁と痰と精液と大便と尿と鼻水と毛髪と骨と、眼耳鼻と口と肛門を特徴とする身体の九穴の傷から種々なる不浄な汚れが流れ出ることは常に生じるものである。そのように一切の支分を集めることと、地水火風虚空を備え、業に従ってもたらされる身体と、すべてを備えた身体に住し、糞尿と唾と痰のこれらを尽くすために断食することを説いている。垢が尽きてから人身が浄化されれば、自らの円満のために成就に喜んで入る。

と説かれている。友人が存在しなくても、随順するものに依存する。例えば世尊がそれぞれの經典に説かれている。

多くの者では論争するであろう。二人では話をするであろう。少女の腕輪のように一人で住すべきである。

と言われる。

随順は『妙臂菩薩所問經<sup>87</sup>』に説かれている。

決して一輪の車が馬をとともなっても道を進めないように、成就者が仲間がいなければ、身体をもつ者は成就を得ることはないであろう。彼は智慧をもち、美しい容姿で、高貴な生まれで、法に帰依し、とても勇敢に勇ましく、根を制御し、愛語し、布施をなし、悲心をもち、飢えと渇きと煩惱に耐え、バラモンと他の天に供養せず、聡明で記憶したことを憶えており、三宝を信じるものが仲間である。そのような功德をすべてそなえた者は論争の時にとても価値があるので、功德の半分、あるいは四分の一、あるいは八分の一をもつ者をそのように真言行者は仲間として頼るべきである。

と言う。ここでは戲論を断じ、戲論を離れることにより友人がいなくても、随順する友人をもつべきである。そのように損害を守る限りの衣服に頼り、困難をとともないとても執着することになる衣服と臥座に依存すべきではない。『妙臂菩薩所問經<sup>88</sup>』に説かれている通りである。

周羅髪を残して髪を剃り、出身の色で衣の色を変えるべきである。白衣と、樹葉や麻や、胡麻の樹皮の衣を着るべきである。

と書かれている。また『聖聖蘇悉地羯羅經<sup>89</sup>』に、

マントラを繰り返す在家の知者は色が変わった衣服を着ない。

と説かれている。これらは容易に得て、自慢することを禁止する意味である。

随順する行道は三種である。よく住することと、苦を制圧することと、特別に行くこととである。

そのうちよく住するとは、どのような行道により住してもそれにより心に傷は生じない。次のように『聖入法界品<sup>90</sup>』に、

菩提心を損なう善根を始めることはすべて魔の行為である。

と説かれており、『入菩提行論<sup>91</sup>』にも、

心を守る禁戒がなければ、禁戒が多くても何をなそうか。

と解説されており、また同じもの<sup>92</sup>に、

私は利得と尊敬と身体と生命はなくてもいいし、さらに善も損なわれてもいいが、心はいかなる場合も損なわれるべきではない。

と説かれている。それ故に一切の時と機会においても心を損なわない行道が行じられる。それ故に規範師ドンミパが（『俱生成就<sup>93</sup>』に）、

学習とは学習を行うことであり、バラモンの場合も淨行であり、常に淨行をなすべきで、心を損なうものではない。

と解説されている。

苦を制圧することは、道を作意することで寒さと暑さや飢渴などの一切の苦により動かされない。『入菩薩行論<sup>91</sup>』に次のように説かれている。

漁師や旃陀羅などは自分の生活だけを思い、寒さと暑さなどの害に耐えているのに、有情利益のために私にはそれに耐えられないのか。

と書かれている。そのように『妙臂菩薩所問經<sup>95</sup>』にも、

欲に執着せず、身体による煩悩に耐える。

と説かれており、同じように『聖忿怒勝義儀軌秘密タントラ<sup>96</sup>』にも、

身体の煩悩を行じてから三種の成就を得るであろう。

と説かれている。そのように『吉祥秘密集会タントラ<sup>97</sup>』にも、

大欲という大きな苦により自らの苦を滅すべきである。

と説かれており、苦という結果をもつものはとても喜ぶように依存すべきであるが、心の本性を前と同じものにすべきではない。それ故に『妙臂菩薩所問經<sup>98</sup>』に、

天の喜びと円満と寿命と力と完全なる身体と多聞と美しい光彩と一つに意を集中することと大きな威力とすべての困難を制御する力により得られる。

と説かれている。

特別な有情の行道は、それにより平静に瞑想をなさない場合に『般若經』の読誦と小像制作と巡回などの福德の資糧を敬うことこそをなすべきである<sup>99</sup>。そのようにまた『聖忿怒明王六面タントラ<sup>100</sup>』に説かれている。

起き上がったから『世尊母般若波羅蜜多經』を読誦する。

と説かれている。『妙臂菩薩所問經<sup>101</sup>』にも説かれている。

寂靜なる浄土の地方にある泥や砂で作られた善逝の塔を縁起を心髄とするものを罪過を浄化するために常に造るべきである。

と説かれている。そのように『聖忿怒勝義儀軌秘密タントラ<sup>102</sup>』にも、

賢者が塔から作り、そのように正法も読誦する。善が僅かな他の者たちも、僅かなものが尽きてからこれらも最高の成就を得ようすることで常に衆生たちに回向する。

と説かれている。それ故に心を損なうことのない福德と知恵の集まりを散逸することをもつ者たちは、衆生利益を望むことによりとても尊敬されることが始められる。これが随順する行の三種である。

そのようにその資糧を得ることにより四種の行道の何れかに喜んで住して、有相や無相のヨーガで心を平静にすべきである。そのように心を平静にしようとする者は五過失を捨てるために八つの捨の行為を保持すべきである。そのうち五過失は『中辺分別論頌<sup>103</sup>』に、

怠惰と、教授の忘却と、沈み込みと高揚と、なさないことと、なすこととである。

と説かれている。その対立項を捨てる八つの捨の行為もその同じもの<sup>101</sup>に説かれている。

場所と、そこに住することと、原因と、結果である。対象を忘れないことと、沈み込みと高揚を理解することと、その捨を明らかにすることと、止の時にヨーガに入ることである。

と言われる<sup>105</sup>。

そのように支を完成した者が止と観を修習すべきことに関して、次のようにその止は二種である。内部に見られることにより得られるものと外部に見られるものを対象とすることである。

そのうち内部に見られるものにも二種ある。身体を対象とすることと、身体に依存するものを対象とすることである。

そのうち身体を対象とするものにも三種ある。身体自身を天の相と認識することと、骸骨などを不浄として認識することと、天杖などを特殊な相として認識することとである。

身体に依存するものにも五種ある。すなわち呼吸を対象とするものと、微細な相を対象とするものと、精液を対象とするものと、光線の支分を対象とするものと、喜樂を対象とするものとである。

外部に見られるものを対象とするものにも二種がある。特殊なものと共通なものとしてである。特殊なものにも二種がある。身体を対象とするものと言葉を対象とするものとしてである。

これが止に入る支分である<sup>106</sup>。どのように修習するかをここでは述べない。何故ならばテキストがとて大きくなくなってしまう恐れがあり、正しい師が領受した概説書に依存することを正しいとするが、修習すべき概説書は文字があるが知り難く、正確には止と観を説いてから解説されるからである<sup>107</sup>。

止の結果が観であり、観の結果が止と観の並立関係である。それもいかなる事物も存在しないので、事物が存在しないことを区別して見て、その同じ時に心を一点にすることで多くの対象を急いで滅して存在するから。それ故に止と観の並立関係のこの場合に知恵の対象となるものと、理趣の通りに存在する知恵と、ヨーガ行者の止と観、我々中観の止と観の双璧関係に特に何があるか。自分の知恵を広げることにも耐えても、ここでは領受される方法だけを明らかにしようとするが、宗義の組織を脇に置こうとするのではなく、聖ナーガールジュナなどが明らかになされてから、僅かでも誰も述べていないので、広大に広げない。

今度はこの別なものを述べるべきである。何らかの相をとともなう止を現前になさずに観が生じるのは適切なのかと言うのならば、それは適切なものである。無相の止である妙観察智から無相の観である無分別智が生じる<sup>108</sup>。そのようにまた『聖迦葉品<sup>109</sup>』に、

二本の木がこすり合ってから火が生じ、その生により自身を燃やしてしまうように、そのように智慧の能力が生じてからも、その生によりそれ自身を燃やしてしまう。

と説かれている。妙観察智は止ではなく、多くの相により認識されると言うのならば、その如くならば、止も止ではない。何故ならば多くの刹那と多くの部分を認識するから。さらにまた止から観に入る場合も、例えば妙観察智により結合しない。それをなさないことは一部に尽きる。そしてこの次第も身体のみを考察することで成就する。聖ナーガールジュナが（『超有譚<sup>110</sup>』に）、

世間は分別から生じ、分別は心から生じ、心も身体から生じるので、それ故に身体を考察すべきである。

と解説し、聖ナーガールジュナも（『菩提心釈<sup>111</sup>』に）解説して、

身体が存在しないという意識は「存在しない」と考察することによる。

と解説され、経典にも「意識は身体を超えない」と説かれている。それ故に一切法は心に収められ、心は身体に収められ、身体を法界に近づけてヨーガにおけるこの所作が概説である<sup>112</sup>。

また種々なる身と意を対象とすべきであり、この概説書は仏を随念してから知るべきである。それ故に有相の止に依ることで無相の止を認識してから観が起こされるというこの主張は、賞讃される。何故ならばその場所が堅固にされ、何らかの止により煩惱が制圧されて除かれ、結果に相応する原因となるから<sup>113</sup>。

ここに私の師の概説書から生じたこれを書くことで、増益する善のその無垢なる月光により有情の無知という眼翳と闇を排除し欲望が寂滅される。智慧の眼により真如の行境を明らかに得なさい。自身も心の散乱などや風などを寂滅して闇を取り除いてから速やかにムニと一つの行境を見なさい。

## 10. コロフォン

『三昧資糧論』という規範師ボーディバドラによる著作を完成する。インドの賢者ヴィールヤチャンドラ<sup>114</sup>に尋ねて、チベットの翻訳官比丘チューキ・シェラップが翻訳し質問して、校訂した。

## クリシュナパーダの『三味資糧論』和訳

インドの言葉で、*Samādhisambhāraparivarta*

チベットの言葉で、『三味資糧論』

仏と菩薩のすべての敬礼する。

### 1. 前行の支分

最初に、人身の宝を浪費せずに人身を得ることは有意義だと認める人は最初に前行の七支分をもつべきである。すなわち、1) 根本に対する信をもち、2) 縁である善友を頼りその功德を受け、3) 尊敬をもち、4) 大きな心で疑惑を食べず、5) 精進をもち、6) すべてのものに対する失望はなく、7) あらゆるところで自慢を捨てることである。以上が前行の支分の七種である。

### 2. 高貴なあり方を損なわない支分

1) 一切の時と相において他者の過失を考察せずに過失を述べず、2) 自分の功德を自慢する心を起こさず、3) 恥を知り謙遜が先行することで自分を護り、4) 三種の律儀を切実に行い、5) お世辞と新たに知り合うことと高所を捨てて常に力をもって住し、6) 場所と時と時機により他のタントラを量ることを知る門から修行すべきで、7) 他者に対する輕蔑を捨てて特に不殺生をなすべきである。以上が世間の罪過を身につけず高貴な在り方を損なわない支分の七種である。

### 3. 障害を捨てる支分

1) 常に少欲と知足と、2) 欲望と食欲を大きくし執着を大きくすることを捨て、3) 怠惰と無精を捨て、4) 多くなりすぎてしまうことを知るべきであり、5) 大きな目的に変わらない話と行為などを捨てて入らず、6) 如理ではないことへの作意を捨てて、7) 何れかの対治に行く者に依存することを知るべきである。以上が障害を捨てる支分の七種である。

### 4. 自分で自分を鼓舞する支分

1) 人身を得ることと仏法を行じ成立させることが宝であると思うことと、2) そのような成就是大きな意味をもつと思い、3) 世間の所作をなすことは確実に無意味だと知るべきであり、4) 他者の苦を自分の対治として頼ることを知るべきであり、5) 自分は常に魔に掌握されておりすぐに死んでしまうと続けて思い、6) 一切の積集を確實の集めることを知るべきであ



り、7) 自分の皺と白髪などを常に考察せずに哀痛すべきである。以上が自分を自分で鼓舞する支分の七種である。

## 5. 欲望を断じる支分

1) 仏の知恵は深くて広大でお言葉と経典は沢山あり、私は知恵が劣り障害に対する怠惰が大きいので一切を述べ知ることはできず、自分自身の寿命が尽きてしまうことを思い、2) この言葉と文字に従う解説の知恵により他者を制することや利益にはならず人が喜びがたいことを思い、3) 自と他の成就の辺際に対する愛憎の二種を捨てて乱用せずに、4) 兄弟と親族と朋友などは確実に客人の道にまとめたものに似ていると思ひ、5) これらの世間の利得と尊敬と賞讃と叱責などは確実に誘惑するものであると知るべきであり、6) 世間の利得と欲望と渴愛と利益と名声と自慢と傲慢などのこれらは確実に火と毒と武器と同じであると知るべきであり、7) 内外のこれらの事物を幻や夢のように相続して考察するべきである。以上が欲望を中斷する支分の七種である。

## 6. 人の目的を速やかに成就する支分

1) 混乱を喜ぶことを捨てて寂処に住むべきで、2) そこでも自分のテキストの通りに天を喜ぶべきで、3) 天を明らかにする三種を努力し精進を強くなすべきで、4) そこでも期待と懷疑と欲望と恐怖を捨てて住すべきで、5) 大悲をもち雄心で勇敢な門から取捨なしに「この私が成就する門から望んでいる目的が成立しない間は身体と生のためにも捨てない」という誓願を成就させ、6) そこでも夢などの特徴と相が生じるいかなるものに対しても喜んだり喜ばなかったりせずに他者に述べず、7) そこでも天の夢と特徴は概説書から知るべきで、特に殺生をしない。それらが人の目的を速やかに成就させ明らかに成立する支分の七種である。

## 7. 身体を護り損害を明らかにする支分

1) そのような人身は極稀で価値があるので身体を護るべきで、衣服と食物と薬などに好ましい通りに行じ、2) 人と非人の損害を護り、3) 適切な場所で快くて損害がないところに住し、4) 身体と心が疲れて疲労させる行為と所作をなさず、5) 夜中と正午と消化の時と身体に病気の状態が生じた時に対象に対して努力をせず、6) 身体と心が疲れて疲労の時に哀痛を滅除して対象を振り回すことを概説書より知るべきであり、7) 常に行道のヨーガにより身体を等至する。それらは身体を護り損害を明らかにする支分の七種である。

## 8. 補足の支分

1) そのように住することにより哀痛と善に対して怠惰となすべきことと所作の分別が生じ

たならば自分で自分に鞭を打ち対治を起こすべきである。2) 身体における損害が突然に生じ、識の区別が異なって生じる場合に、自分の経験と概説書により治すべきであり、さらにまた他の賢者にも尋ねるべきである。3) 勝者のお言葉と自分に能力があることと他者の利益を見たならば、四種の行為を『金剛頂髻タントラ』と概説書より知るべきである。4) 煩悩に似ていないものと衆生の分別に似ていないものに対する対治に似ていないものを広大な經典から知るべきである。それらは補足や付録の支分の四種である。

## 9. コロフォン

『三昧資糧論』というクリシュナバーダによる著作を完成する。

インドの賢者クリシュナバーダ自身と主校翻訳官で比丘のチューキ・シェーラップが翻訳し質問し、校訂した。

# ディーパンカラシュリージュニャーナの 『三昧資糧論』和訳

インドの言葉で、*Samādhisambhāraparivarta*

チベットの言葉で、『三昧資糧論』

世間主に敬礼する。

最初に悲の力から生じた完全なる菩提心を堅固にすべきである。存在を享受する楽しみに執着せず、執事することを打つことによる方向である。

信などの財産を円満にし、師と仏を等しく尊敬し、彼が説いた正法を行じることを完全に守ることに精進する。

瓶と秘密の灌頂を師の親切により完全に得て、身口意が浄化された成就者は成就を増益する。

三昧の支分から生じた資糧を完全にしてから速やかに成就を得て、そのようにマントラの理趣に住するのである。

三昧の支分を損ない、その対立する方向に住するならば、百億の生によっても三昧を成立することはないであろう。

マントラの行に住するヨーギンはそれ以外の心を捨て、乱れることなく精進に励むべきである。

三昧の支分と対立する方向のものを確定させるために、その三昧の支分と対立する方向のものをまとめてから解説すべきである。

円満な戒と、財富を見ないことと、忍をともなうという誓願を堅固にすることと、人の混乱を捨てることである。

身口意の業に対する正知を備え、仏を尊敬し、賞讃を記憶する身体の随念を正しく備えている。

何れかの時に何れかの所作を随念することを堅固にし、五障を捨て、食事の量を知り、行道を釣り合わせ、

世間法のすべてに対して心が等しく、器物を減らすこれが支分であって、顛倒是対立する方向である。

『三昧資糧頌』を述べたその福德により、有情は三昧を金剛のように得なさい。

『三昧資糧頌』という偉大な軌範師で賢者のディーパンカラシュリージュニャーナの著作を

完成する。

インドのその賢者自身と主校翻訳官で比丘のシャーキャ・ロドゥが翻訳し質問し、校正した。

注

- 1 Tr. by Viryacandra and Chos kyi shes rab. Tib. D. No.3924, Ki 76b7-91a6; P. No.5319, A 87a8-100a8; Tsering 2004, pp.31-99.
- 2 Tr. by Nag po shabs, Chos kyi shes rab. Tib. D. No.3925, Ki 91a7-92b7; P. No.5320, A 100a8-102a6; Tsering 2004, pp.101-108. 彼については、石田2004, pp. (57)-(58)を参照。訳者のもう一人は、ボーディバドラのテキストのチベット人翻訳者でもある。
- 3 Tsering 2004 にはこの2論のチベット語訳校訂テキストとヒンディー語訳が掲載されている。
- 4 Tr. by Dīpaṅkaraśrījñāna, Shākya blo gros. Tib. D. No.2460, Zi 134b6-135a6, No.4485, 37b2-38a3; P. No.3288, Tshi 169a2-b5, No.5398, Gi 46b8-47b2; Negi 1992, pp.72-75.
- 5 羽田野1987, p. 72. ただし羽田野は、Nag po zhabs chen po を Mahākṛṣṇapāda (Baliṃ Acārya?) とし、Byang chub bzang po について、ボーディバドラとは別人であるとする。アティシャ伝における、Bhadrabodhi という記述を参考にすると、そのサンスクリット名については注意が必要である。羽田野氏の見解については、関西大学の伏見英俊先生より貴重なご指摘をいただいた。ここに記してお礼申し上げる。
- 6 ディーパンカラシュリージュニャーナの伝記である『詳伝 (*rNam thar rgyas pa*)』と『詳伝一般 (*rNam thar rgyas yongs grags*)』の記述によると、ボーディバドラとの関係は012, 034, 048に師の一人として列挙されており、クリシュナバーダとの関係は021にヤマーリの教えの相続者としてあげられている。Cf. Eimer 1979, 望月2005b, p. 2.
- 7 望月2006.
- 8 望月2005b. また、ボーディバドラの『智心髓集疏』がディーパンカラシュリージュニャーナの『法界見歌』に与えた影響については、望月2006bを参照。
- 9 ただしその著者名の表記については、Nag po, Nag po pa, Nag po zhabs, Kṛṣṇa pa というものが見られ、これらから Kṛṣṇapāda というサンスクリット名が想定される。Tsering 2004, p. 9 は、彼を八十四密教行者の一人である Kāṅhapa (=Kṛṣṇacārin) とする。
- 10 北京版の番号のみを列挙すると、次のようになる: Nos. 2164-2170, 2177, 2251, 2313, 2317, 2325, 2381-2389, 2430, 2507, 2509, 2512, 2683-2686, 2811, 2819, 2820, 3032, 3035, 3127, 3139, 3215, 3318, 4543, 4664, 4667, 4818, 4822, 4961, 4974, 4976-4980, 4987, 4989, 5029, 5134, 5180, 5181.
- 11 本テキストについては、石田2004 を参照。

- 12 北京版の番号のみを列挙すると、次のようになる：76, 134, 2148, 2150, 2381-2384, 2387, 2650, 2682-2686, 3118, 3725, 3318, 3891, 4534, 4543, 4687, 4822.
- 13 Tr. with Tshul khriims rgyal ba. Cf. 望月2005.
- 14 詳細については、望月2006を参照。
- 15 障法の捨離としての魔事については、ナーガールジュナに帰される『経集』にもまとめられている。  
Cf. 一島1990.
- 16 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 274b4-5. 望月2002, p.11.
- 17 *Krodhavijayakalpagaḥyatantra*. Tib. D. No.604, Pha 286a3.
- 18 *Mañjuśrīvikurvāṇaparivartasūtra*. Tib. D. No.97, Kha 242b4. Cf. 一島1990, pp.338-339.
- 19 *lHa'i bu rin po che mchog gis zhus pa*.
- 20 *Subāhupariṛcchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 125a4.
- 21 *Subāhupariṛcchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 140a3.
- 22 *Vajrasekharamahāguhyayogatantra*. Tib. D. No. 480, Nya 205b2.
- 23 *Asokadattavyākaraṇasūtra*. Tib. D. No.76.
- 24 *Seng ge lung bstan pa. Siṃhupariṛcchāsūtra ?* Tib. D. No.81.
- 25 Tib.: *Byang chub sems dpa'i rnam par dgod pa bcu bstan pa'i le'u*. Tib. D. No.44, Ka 247a3.
- 26 *Gṛhapatyugrapariṛcchāsūtra*. Tib. D. No.63.
- 27 *Ratnolkādhāraṇīsūtra*. Tib. D. No.145.
- 28 *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No.44, Ka 203a1.
- 29 *Prātimokṣasūtra*. Tib. D. No.2, Ca 2b3.
- 30 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 273b6-7. 望月2002, p.8.
- 31 *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No.44, Ka 247a3.
- 32 *Adhyāśayasañcodanasūtra*. D. No.69, Ca 145b3.
- 33 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 273b7. 望月2002, p.8.
- 34 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 11. 60.
- 35 *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No.44, Ka 207b3.
- 36 *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No.44, Ka 207b7.
- 37 Tib.: *Don dam pa'i rigs pa. Dohākośa* 44. Tib. D. No.2224, Wi 73b7. 奈良1965, p.31.
- 38 Tib.: *bDe mchog phyi ma*.
- 39 *Dohākośa*. Tib. D. No.2224, Wi 74a7.
- 40 *rDo rje gtsug tor*. Cf. *Dhyānottarapaṭalakrama*. Tib. D. No.808, Wa 225a6.
- 41 *Subāhupariṛcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 127b4.
- 42 *Abhidharmakośakārikā* 7.26c.

43 *Bodhicaryāvatāra* 8.4cd.

44 *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 122a2.

45 *Suhṛllekha* 66.

46 *Anityatāsūtra*. Tib. D. No.309, Sa 155b2-3.

47 *Bodhicaryāvatāra* 8.17.

48 *Bodhicaryāvatāra* 8.20-21.

49 *Bodhicaryāvatāra* 8.23.

50 *Adhyāśayasañcodanasūtra*. Tib. D. No.69, Ca 142a5.

51 *Bodhicaryāvatāra* 8.22.

52 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 273b7-274a2. 望月2002, p. 9.

53 *Bodhicaryāvatāra* 8.7-8.

54 *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 132b6. Cf. 大塚2001, p.48.

55 *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 132b7.

56 *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 121b6-122a2. Cf. 大塚2001, p.55.

57 *Suhṛllekha* 58.

58 *Saptakumārikāvadāna* by Guhyadatta. Tib. D. No.4147.

59 *Śiṣyalekha* 68-70, 72. Hahn 1998, p. pp.96-101. Hahn 1998, p.98 によると、第71偈はチベット語訳のみで、サンスクリット・テキストでは欠けている。この偈は、引用でも欠けており、本来は存在せず、これ以後に挿入された偈という可能性がある。

60 *Bodhicaryāvatāra* 8.26-30.

61 *Sarvadharmasvabhāvasamatāvīpañcitasamādhirājasūtra*. Tib. D. No.127.

62 *Bodhicaryāvatāra* 7.1.

63 *Suhṛllekha* 55.

64 *Suhṛllekha* 104.

65 *Śiṣyalekha* 65-67. Hahn 1998, p. pp.94-97.

66 *Bodhicaryāvatāra* 2.34.

67 *Saptāṅga* by Vāgīśvarakīrti. Tib. D. No.1888, Pi 202b2. ただし翻訳は一致しない。

68 *Dohākośa*. Tib. D. No.2224, Wi 73a2.

69 *Bodhicaryāvatāra* 8.4

70 *Vimalakīrtinirdeśasūtra*. Tib. D. No.176, Ma 201b1.

71 *Gayāśiṣasūtra*. Tib. D. No.109, Ca 289a1.

72 この句は、Kamalaśīlaの*Bhāvanākrama*やDīpaṃkaraśrījñānaの*Bodhipathapradīpa* 175 にも引用される。Bodhibhadraは*Bhāvanākrama*における引用を知っていた可能性があり、Dīpaṃkaraśrījñāna

は本テキストにおける引用を知っていた可能性がある。Cf. 望月2003, p.2.

- 73 *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No.44, Ga 246a2.
- 74 中村1978.
- 75 *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No.44, Ka 208a5.
- 76 *Dākinīvajrapañjaramahātantrarājakaḷpa*. Tib. D. No.419, nGa 31a6.
- 77 *Dākinīvajrapañjaramahātantrarājakaḷpa*. Tib. D. No.419, nGa 31a7.
- 78 *Bodhicittavivaraṇa* 73. Lindtner 1982, pp.206-207.
- 79 *Madhyamakālaṃkāra* 83.
- 80 *Mahāvairocanaḅhisambodhivikurvatyadhiṣṭhānavaipulyasūtra*. Tib. D. No.494, Tha 190a4.
- 81 *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 119b6-120a3. Cf. 大塚2001, p.51.
- 82 *Suhrlekha* 38.
- 83 *'Phags pa Gong pos zhus pa*.
- 84 *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 120b6.
- 85 *Susiddhikaramahātantrasādhanopāyikaṭaḷa*. Tib. D. No.807, Wa 206a5.
- 86 *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 125b2.
- 87 *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 119b3-5, 大塚2001, pp. 53-54.
- 88 *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 120a5, 大塚2001, p. 49.
- 89 *Susiddhikaramahātantrasādhanopāyikaṭaḷa*. Tib. D. No.807, Wa 173b3.
- 90 *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No.44, Ga 246a3.
- 91 *Bodhicaryāvatāra* 5.18cd.
- 92 *Bodhicaryāvatāra* 5.22.
- 93 *Sahajasiddhi* 3. Tib. D. No.2223, Wi 70a4.
- 94 *Bodhicaryāvatāra* 8.40.
- 95 *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 126a6.
- 96 *Krodhavijayakalpaguhyatantra*. Tib. D. No.604, Ba 17b2.
- 97 *dPal gsang ba 'dus pa*.
- 98 *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 137b5.
- 99 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No.3948. Khi 274b7-275a1. 望月2002, p. 12.
- 100 *Khro bo'i rgyal po gdong drug pa'i rgyud*.
- 101 *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 119b2. Cf.大塚2001, p.45.
- 102 *Krodhavijayakalpaguhyatantra*. Tib. D. No.604, Ba 12b3.
- 103 *Madhyāntavibhaṅga* 4.4.
- 104 *Madhyāntavibhaṅga* 4.5.

- 105 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 275a1-3. 望月2002, pp.12-13.  
 106 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 275a7-b4. 望月2002, pp.14-15.  
 107 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 275a6-7. 望月2002, pp.15-16.  
 108 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 275b4-5. 望月2002, p.15.  
 109 *Kāśyapaparivartasūtra* [69]. Staël-Holstein 1977, p.102  
 110 *Bhavasaukrāntiparikathā*. Tib. D. No.4162, Ge 165b4.  
 111 *Bodhicittavivarana* 36ab. Lindtner 1982, p.196.  
 112 *Bodhimārgadīpapañjikā*. 望月2003, p. 32.  
 113 *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No3948. Khi 275b5-6. 望月2002, p.15.  
 114 北京版には、Bināya tsandra とある。

## 参考文献

- Eimer1979 Helmut Eimer, *rNam thar rgyas pa : Matelialien zu einer Biographie des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*. Wiesbaden.  
 藤田1981 藤田光寛「Byaṅ chub bzaṅ po 著『菩薩律儀儀軌』について」『密教文化』141, pp.100-87.  
 藤田1983 同「『菩薩律儀二十』について」『中川善教先生頌徳記念論集 仏教と文化』同朋舎出版, 1983, pp.255-280.  
 藤田2000 同「菩薩戒の受戒儀軌」『高木神元博士古希記念 仏教文化の諸相』山喜房佛書林, pp. 237-249.  
 藤田2002 同「Candragomin 著〈菩薩律儀二十〉とその注釈書2種一校訂テキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』15, pp.(1)-(131).  
 一島1990 一島正真「『経集』における菩薩の魔事」『斎藤昭俊教授還暦記念論文集 宗教と文化』こびあん書房, 1990, pp.337-356.  
 Hahn 1999 Michael Hahn, *Invitation to Enlightenment*, Dharma Publishing, Berkeley.  
 羽田野1987 羽田野伯猷「チベット・インド学集成 第一巻チベット篇」法蔵館.  
 石田2004 石田貴道「Kṛṣṇapādaの『入菩薩行論』理解について」『駒沢大学仏教学部論集』35, pp.(55)-(78).  
 Lindtner 1982 Christian Lindtner, *Nagarjuniana*. Copenhagen 1982.  
 松本1987 松本史朗「ポーディパドラ」三枝充恵編『インド仏教人名辞典』法蔵館, pp.235-236.  
 Mimaki 1976 Katsumi Mimaki, *La Réfutation Bouddhique de la Permanence des Choses et la Preuve de la Momentanéité des Choses*. Paris.  
 望月1999 望月海慧「ディーバンカラシュリージュニャーナの『入菩薩初学道灯説示』について」(日本宗教学会第58回学術大会配布資料).



- 望月2002 同「ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)『身延論叢』7, pp.1-18.
- 望月2003 同「ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6)『身延論叢』8, pp.1-45.
- 望月2005 同「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明荘厳論』和訳(1)『身延論叢』10, pp.1-40.
- 望月2005b 同「ボーディバドラとアティシャ」(日本宗教学会第64回学術大会配布資料).
- 望月2006 同「Bodhibhadra の Samādhisambhāraparivarta について」『印度学仏教学研究』54-2, pp. (70)-(76).
- 望月2006b 同「ディーバンカラシュリージュニャーナの『法界見歌』について」『2006年韓国仏教学結集大会論集』(未刊).
- 中村1978 中村薫「華嚴経に於ける魔について」『印度学仏教学研究』27-1, pp. 124-125.
- 奈良1965 奈良康明「サラハバード作 ドーハー・コーシャ(翻訳および研究ノート)(1)」『駒沢大学研究紀要』24, pp.13-33.
- Negi1992 Ramesh Chandra Negi, *Atiśaviracitā Ekādaśagranthah*, Sarnath.
- 大塚2001 大塚伸夫『蘇婆呼童子請問経』に見られる初期密教修行者像について『密教学研究』33, pp.37-74.
- Staël-Holstein 1977 Baron A. von Staël-Holstein, *The Kācīyapaparivarta*, repr., Tokyo.
- Tsering 2004 Tsering Dolkar, *Acārya Bodhibhadra-Kṛṣṇapāda-Viracitau Samādhisambhāraparivartau*, Sarnath.

## 【キーワード】

Bodhibhadra

Kṛṣṇapāda

Dīpaṅkaraśrījñāna Samādhisambhāraparivarta